もくじ
斉田頼康の伝説 … P1
あだち民具図典③ 万石通し … P2
はい、文化財係です㉕ 荒川堤五色桜碑 … P3
新刊紹介 … P4

足立史談

第637号

2021年3月15日
足立区立郷土博物館内
足立史談編集局
〒120-0001
東京都足立区大谷田5-20-1
TEL 03-3620-9393
FAX 03-5697-6562

戦国武士の言い伝え
―斉田頼康の墓―

多田文夫

足立区花畑三丁目の實性寺は、平安時代末期の優美な阿弥陀如来坐像(ご本尊。『足立の仏像』)や、徳川将軍家の御成寺院としての歴史、さらに家塾主、牧野隆幸の事績碑「牧野先生碑」(区登録文化財)などで著名な、足立の名刹の一つです。

1　墓標と寺伝

牧野先生碑にほど近い本堂脇に、一つの尖頂舟形墓標がまつられています。實性寺の開基、斉田頼康の墓です(右写真)。墓標は、頼康は戦国時代の大永元年(一五二一)七月十三日に没したことが記されています。

人物の詳細についての記述は、文政五(一八二二)年に成立した「新編武蔵風土記稿」(以下「風土記」と略します)に記事があります。花又村の項よりも岩槻城下(現さいたま市岩槻区)龍門寺の項に詳述があるのでご紹介します。

龍門寺は天文十九年斎田若狭守開基せりと云ふ。若狭守が法謚を玉峯道全上座と号し卒年は伝へず。按に足立郡花又村宝性寺の開基斎田左兵衛尉頼康・大永元年七月二十三日卒せりと、彼寺の伝へに頼康は岩槻の城主雅楽頭某の子なりと、されど岩槻は其頃太田氏の居城にして、彼家系にも雅楽頭と云をのせざれば、恐らくは若狭守も頼康の一族にして太田氏の旗下なりしならん。今も太田家に斎田氏の家人あり

この記述(傍線部)では「風土記」の編者であった江戸幕府の昌平坂学問所(昌平黌)地誌調所が、「斉田」は「斎田」とも記したことを前提に、戦国時代の岩槻城(岩付城)の太田氏の家臣と捉えて記述しています。なお、官途名は史料により「左衛門尉」や「左兵衛尉」と表記され、ばらつきがあります。

實性寺(花畑) 斉田頼康が開基

2　記録と言い伝え

明治一〇年(一八七七)の明細(「浄土宗明細簿」、東京都公文書館蔵)にも、斉田頼康の名前が記され、十二年(一八七九)には前掲の「風土記」採録の言い伝えも合わせて記録されています。江戸時代の後半に實性寺での言い伝えが、明治のはじめにも由緒として語られていたことが確認できます。

一方で地域での歴史としては文字記録が未詳ですが、斉田頼康と花畑の旧家について郷土博物館ボランティアの鈴木恒雄氏が調査されていました。鈴木氏によると松野英宣氏、中西義衛氏らが伝えたこととして、次のことをご教示頂きました。

（1）斉田氏は實性寺の住職となっていたこと。

（2）寺にゆかりが深い花畑の鈴木家、金杉家、青木家の三つの家は、いずれも斉田頼康の家臣だったと伝えられたこと。

この二つは地域の記憶とも言えます。「風土記」や明治の寺院明細も寺伝、であり、鈴木氏の採録も言い伝えです。今もなお頼康のことを地域の記憶としています。

3　歴史の伝え方

家や身近な町の歴史の伝え方は、長く言い伝えでした。古文書や石碑などに「記録化」されるのは、江戸時代後半からで数も限られ、古記録の多くは失われます。「言い伝え」という形式で手がかりが遺ることが重要です。

頼康歴史の事実とするには一次資料が必要ですが残念ながら未確認です。そのため現在は、「斉田頼康という戦国の武士が花畑に来たという伝説の存在を確認した」という段階です。あらためて斉田という姓について情報を集めてみると「斎田」「佐枝」とも記すとされ（WEB「埼玉苗字辞典」ほか）、先行研究もありそうです。今後も調べてみたいと思っています。

【付記】　實性寺ご住職をはじめ、鈴木恒雄氏や花畑の皆さんにご教示をたまわりました。記して感謝申し上げます。

（郷土博物館学芸員）

あだち民具図典③　万石通し

足立の歴史文化を知る手立てとなる郷土博物館の収蔵する生活資料の紹介を行います。

■足立と水田　かつての足立区は、江戸東京に隣接する近郊農村でした。流通が限られていた時代、新鮮なうちに届けることができる近郊農村の作物は、江戸東京の生活を支えていました。江戸時代には、足立区域で生産された「渕江米」が江戸米会所（こめかいしょ）の格付けで、二十四ランク中三番目に格付けされています。

足立区産の米は東京都で作られた米の供出量のうち四割を占め、東京の穀倉地帯として知られていました。昭和三十（一九五五）年頃までは広い水田が広がっていましたが、農村地帯であった足立区も急速な人口の増加により都市化が進み、田畑は少なくなっていきました。

■穀物の選別機　万石通しは穀物の選別に使用する農機具です。主に籾摺り後の玄米と、くず米やもみ殻を選別するために使われていました。一度に大量の米を選別できることから、多くの量を意味する「万石」という名前がついています。

米の注ぎ込み口である漏斗（ろうと）と、米をふるうための金網から成り立っています。漏斗に米を注ぐと下部の金網に流れ、傾斜状に取り付けられた金網を通過することで小さなくず米が網の目から抜け落ちます。下まで到着した米は再び上から流し込みます。この作業を数回繰り返すことによって米を選別しました。実際に使用したことがある方もいるのではないでしょうか。

■痕跡から見る暮らし　郷土博物館には、区内で使用されていた万石通しが収蔵されています。一見すると同じものに見えるものもありますが、それぞれ個性があります。製作者の違いや用途の違いもありますが、所蔵者の使い方や工夫によって、独自の道具に加工されています。

万石通しとよく似ていますが、漏斗が一体となったひとまわり小さい選別機に五百石があります【写真1】。側面に「千住三丁目下野屋市左衛門」、反対の側面に「大極上五百穀簾請合」と書かれていることから、下野屋市左衛門が作った五百石通しであることが分かります。全国的に見られる万石通しと千石通しに対して、五百石通しは東京やその周辺の一部の地域で使われていたとされ、あまり知られていないようです。

万石通しに書かれた文字や修理の痕跡は、使用された環境や使用者の暮らしを知る手がかりになります【写真2】。この万石通しは裂けてしまった板を繋ぎ合わせて補修してあり、所蔵者が一つの道具を大切に使い続けていたことがうかがえます。また、開閉する脚部を針金で固定しており、金網の角度を調整しやすく工夫がされています。

写真１　五百石通し（56.5cm×30.9cm×58.3cm）

側面には「大極上無類飛切萬石篩請合」といった売り文句が書かれ、反対の側面には「武州鳩ケ谷町朝日町洲崎甚久郎製造」と、製作者の情報が書かれています。漏斗や脚部には「東京市足立区北鹿浜町二七五〇　鈴木信三」や「昭和拾五年拾壱月」と書かれており、使用者の情報や使われていた年代を読み取ることができます。

かつての鹿浜は田畑が広がっていました。鹿浜を通る道のほとんどが農道だった中、主要な道に鳩ケ谷道（現在の鳩ケ谷街道）がありました。万石通しに書かれた情報から、鳩ケ谷で作られたものを鹿浜の人が購入して使っており、その際に鳩ケ谷道を行き来していたと考えられます。万石通しを通して、鳩ケ谷と鹿浜の人々が繋がっていた当時の暮らしの様子を見ることができます。このような職人の名前や製作年が書かれた民具を、記年銘民具と呼んでいます。さまざまな情報を持つ貴重な資料です。

万石通しといった日本各地に見られる民具でも、使われた痕跡や文字などの情報を読み解くことによって、その地域の暮らしを知ることができます。時の流れとともに、実際に使用していた人から話を聞くことは困難となっていますが、人に代わって物が暮らしを語っているのです。

（郷土博物館専門員　佐藤夏美）

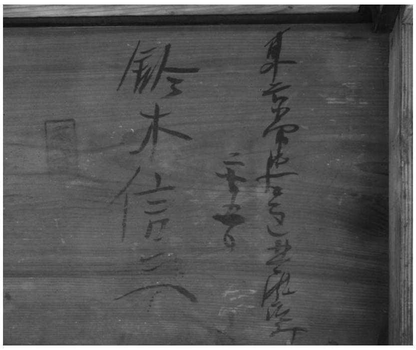

写真２　万石通し（129.0cm×49.5cm×116.5cm）

はい、文化財係です㉕　荒川堤五色桜碑

だんだんと春めいた季節になってきました。気象庁によると、東京で過去十年、もっとも早く桜が開花したのは去年の三月十四日で、もっとも遅かったのは二〇一一年の三月三十一日だそうです。そこで、今回は桜に関係した荒川堤五色桜碑（足立区登録有形文化財）をご紹介します。この碑は現在、都市農業公園（鹿浜二―四四―一）前の荒川土手に立っています。

■荒川堤五色桜　荒川堤（熊谷堤）は、荒川（現隅田川）が氾濫して水害に遭うのを防ぐため、戦国末から江戸時代初頭にかけて築かれたといわれ、高さは三m程でした。土手道は狭かったのですが、千住と川口をつなぐ道としても重宝されました。

明治十八年（一八八五）七月、暴風雨が発生し、千住大橋や吾妻橋が損壊する被害がありました。荒川堤も大きな被害を受け、渡辺洪基東京府知事が現地視察をしました。この時、沼田村戸長でのちに江北村（明治二十二年成立）の初代村長となる清水謙吾の屋敷に知事が立ち寄りました。そこで荒川堤の不備を清水が知事に訴えたことから、荒川堤は修理されることになり、道幅が広がりました。

翌年三月、清水が近隣の村々の戸長や有志たちと相談し、里桜七十八品種三二二五本を土手道に植えました。その距離は、おおむね現在の扇大橋北詰付近から首都高速川口線に沿って鹿浜五丁目の新芝川沿いに至る、およそ五・八㎞にも及びます。

これほどの大事業には多額の費用がかかりますが、清水は近隣住民に呼びかけ二九五五円を集めました。明治時代の小学校教師の初任給が八～九円程度だったというので、現在の金額でいうと一〇〇〇万円程度になるでしょうか。五色桜はこうした地元の人々の熱意によって作り上げられたのです

五色桜の由来は、七十八品種もの桜が様々な色に咲き誇ることから、当時の新聞に「五色に彩られ」と紹介されたことにちなんでい

ます。明治四十三年四月二十四日には、迪宮（みちのみや　のちの昭和天皇）が五色桜を見学するほど有名な観光地となっていました。

■国による名勝指定と建碑　迪宮が見学された直後、明治四十三年の大洪水が発生します。さらに荒川対岸の関東酸曹が出す煙や観光客の急増といった問題などから五色桜に傷みが目立つようになりました。そこで、桜博士として著名だった東京帝国大学名誉教授の三好学博士が尽力し、大正十三年（一九二四）十二月に「史蹟名勝天然記念物保存法」に基づき、内務大臣から「名勝」指定され、五色桜は保存されることになりました。そして、荒川堤五色桜碑（銘文は「名勝　荒川堤桜」）が現在の都営バス荒川土手バス停付近の荒川堤防脇に建碑されたのです。

「天然記念物」という言葉を日本に紹介したのは三好博士で、「史蹟名勝天然記念物保存法」は、現在の文化財保護法の前身です。つまり、荒川堤五色桜は、この地域だけではなく、国にとっても重要なものだと認定されていたのです。

■里帰り桜　明治四十五年、当時の東京市長尾崎行雄（憲政の神様として著名）が、アメリカ合衆国首都ワシントンに日米親善のため五色桜から採取した枝を接穂として贈呈しました。接穂はポトマック河畔に植えられ、現在も花を咲かせています。

しかし、本家の荒川堤五色桜は、名勝指定もむなしく、荒川放水路の建設や環境の悪化などから昭和二十年代には姿を消しました。

しかし、昭和五十六年、ポトマック河畔に植えられた五色桜から接穂したものがナンシー・レーガン大統領夫人によって日本に贈られ、舎人公園に植樹されました（レーガン桜）。同年、三千本の桜も里帰りし、区内の公園や小学校などに植えられ、現在も多くの方に親しまれています。

荒川堤五色桜碑は、道路事情から昭和六十一年に現在地に移転しましたが、足立区と桜の歴史を伝える貴重な文化財として、今も立ち続けているのです。

【参考文献】
舩津金松「荒川の五色ザクラ」1～7（『足立史談』一七六～一八二、昭和五十七・五十八年）

（文化財係学芸員　佐藤貴浩）

訂正　はい文化財係です22「来迎寺の庚申塔」（足立史談六三三号）に誤りがありました。お詫びして訂正します。三段　右から一行目／× 真言宗豊山派→真言宗室生寺派／四段　右から二行目／× 対馬安→対間安／同　右から四行目／× 川名□左衛門→川名清左衛門

新刊紹介

佐藤秀樹『千住の酒合戦と後水鳥記』

昭和五十九年の郷土資料館開設準備時代から勤務した当館元学芸員、佐藤秀樹氏が、昭和六十二年に担当した企画展「千住の酒合戦と江戸の文人展」以来取り組んできた「千住の酒合戦」とその記録である「後水鳥記」・「闘飲図巻」などに関する研究をまとめた一冊です。▼文化十二年（一八一五）に千住の飛脚問屋、中屋六右衛門の還暦を祝い、酒井抱一や谷文晁ら著名な文人も関わって催された「千住の酒合戦」。本書は、その後に続々と出され、現在は国内外各地に所蔵されている幅広い酒合戦記録を分析し、酒合戦の内容や背景を検証すると共に、それら各記録類の成立過程にも深く迫った、「千住の酒合戦」をめぐる包括的な研究となっています。▼検証と共に、複数の写本・別本が確認される、大田南畝筆の記録戯文『後水鳥記』や、記録書画巻「闘飲図巻」も含め、現段階で確認され得るおおよそ全てと言える酒合戦関連の記録・資料が網羅されています。今後の「千住の酒合戦」研究に大きく資する一冊となるでしょう。

（学芸員　小林）

▼発行＝令和3年1月22日▼出版社＝三弥井書店▼四六判、228頁▼ISBN＝978―4―8382―3379―3　C0093

穂高健一『紅紫の館―郷士・日比谷健次郎の幕末』

歴史小説の作家、穂高健一先生が描いた歴史小説で、先月まで開催していた当館の文化遺産調査特別展『名家のかがやき』でもご紹介した幕末明治期に活躍した日比谷健次郎を主人公とし、足立や周辺の人々の幕末から戊辰戦争期の歴史群像が描かれています。▼表紙を飾るのが日比谷家伝来の古今雛ですが三月二一日まで上野の東京国立博物館「おひなさまと日本の人形」展で公開中。▼穂高先生は資料を駆使する作家として知られています。本書でも千住の不動院にある「芸州供養塔」（棚網保司氏・武田正視氏論考、本誌一九〇～四号掲載）にも関係が深い広島藩兵の従軍日記から、戊辰戦争当時、「延壽」という年号が用いられていたこと等、あらたな資料紹介も行われています（「あとがき」参照）。ご一読をお薦めします。

（学芸員　多田）

▼発行＝令和3年1月15日▼出版社＝未知谷（みちたに）▼四六判、272頁▼ISBN＝978―4―89642―628―1　C0093